

## 大阪長屋の再生 ストック活用力育成プログラム

正会員 谷 直 樹 君  
正会員 竹 原 義 二 君  
正会員 藤 田 忍 君  
正会員 小 池 志保子 君

持続可能な社会の再構築を目指すべき今、建築ストック活用の必要性が求められながら、建築教育ではその取り組みの成果は未だ表に現れてこないのが現状である。

谷直樹君らが実践する教育プログラムは、大阪の住文化を代表する長屋の再生を、学部4学年を通しての共通の現場に据え、「住文化史」「まちづくり論」「住空間設計」という3分野の視点からの取り組みを通して総合的でバランスのとれたストック活用力を身につけることを目標としている。プログラムの最大の特徴は、現実に住み継がれている場所を教育現場とする点である。今回の現場は、JR大阪駅から徒歩15分ほどの敷地にある築80年以上の長屋と所有者の住居であるが、大阪市にはこのような戦災に焼け残った長屋などの木造住宅が数多くあり、それらは老朽化し耐震性、防火性、住環境にも問題がある。このように、今回の現場を数年間、取り組みの場としたうえで、その成果を踏まえ今後継続的に取り組みの場を広げていく計画を内在している。このような特徴を有した本教育プログラムでは、ストック活用能力を習得するため教育方法として以下のような点が評価された。

第一は、学生が“都市の中の木造長屋とそこでの暮らし”という本物の現場に身を置き、住まい手と同じ目線で取り組むことである。日本の木造住宅や集まって暮らすことの価値を見出しながら耐震改修など技術的裏付けを持って空間の改善を実行していかなければならない。

第二は、4回生の卒業設計での耐震改修工事を現場実習、また3回生の設計製図課題（まちづくり）で企画される「長屋路地アートフェスティバル」での企画やイベント参加に、学年を横断して取り組むことである。建築に必要な知識やチーム力の習得ばかりでなく、4年間を通しての現場とのつながりによって、ストック活用の重要性を体得することができる。

第三は、住宅の維持管理方法の習得を内在していることである。メンテナンスや補修の実習を通して、現代人が忘れていた「住みこなし」能力の育成が期待できる。

このように実践教育に軸足を置きつつも、学生に建築・環境の基礎となる科学・工学に関する理解を深めさせ、さらに体系的な教育のプログラム化がなされれば、一層の発展が期待できよう。

本教育プロジェクトは、学生の参加により社会問題でもある住宅ストック活用に関して実践的に取り組んだものであり、今後の建築教育の発展に大きな貢献をしたものと評価される。

よって、ここに日本建築学会教育賞（教育貢献）を贈るものである。